

特/05
704



15号

内務省
15.7.29
正

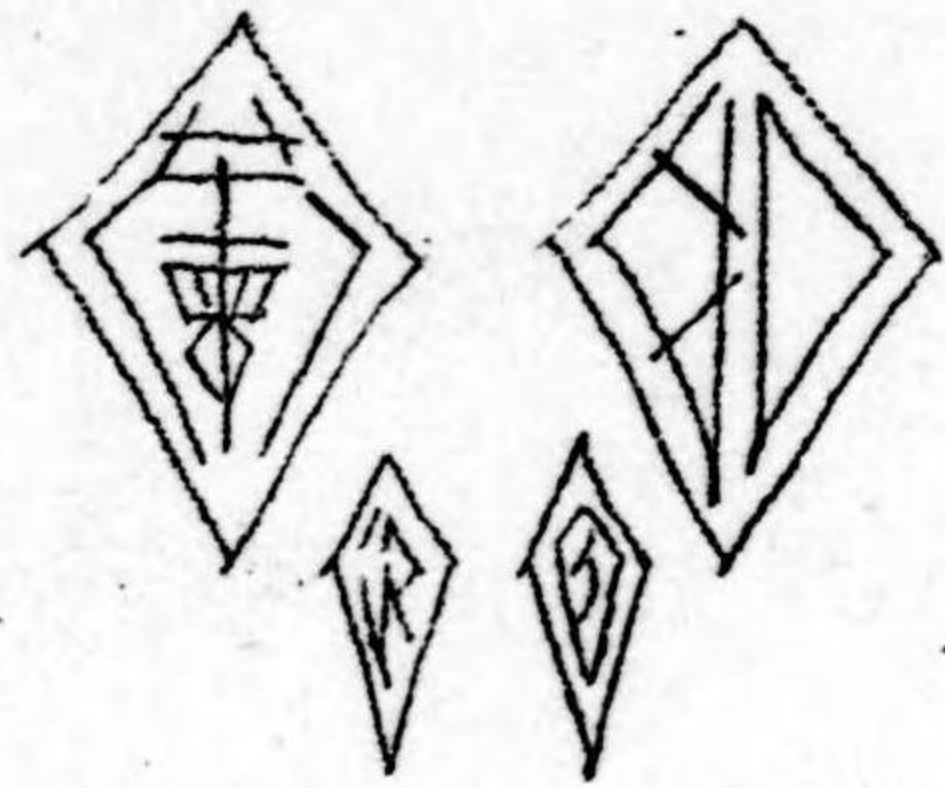
国立国会
51.10.1
図書館

如蘭使楽部出版



始





々 卷 頭 言 |

◇ 兵 舎 山 喫 | 〇・きりう

◇ 松 山 の 街 | 〇・はじむ

◇ 編 輯 後 記 |

X

人生に於て音楽ほと好むものはなり。けれども悪愛はそれにもまさつて好むものだ。さうだ！悪愛ほと好むものは心に定つてありはしなり。眞理よりも、藝術よりも、名誉よりも、阿光よりも、そして尙この上に生命よりも。

X

道徳が法律でないことは、あまりに明白の明白である。けれども法律が道徳となることも、あまりに明白の明白ではなぬか。さればだれが我々の良心の発布するなり、そして我々の良心の命に喚ばぬはなりなぬか。

X

哲学者プラウストは遂に悪魔に誘惑された、彼は眞を求めたのか。否、「至善」をか、否。彼は青春と恋愛を求めたのだ。——然り「美」の体験を！

(萩原氏著 新しき欲情から)

兵舎水喉

1926. 6. 20.

きゆき

桐 尤

今日もそほふる桐の雨

今日もほそく暮れて蛇く

灯のつかぬ班に居て

反りさわめき庭に秋め

雨の音愉くなやましさ

さて今日も来ぬ彼うせの文

千エツ

今日も出て行く哀習

かからふ燃えたる高良台

白杏・赤杏・バラく松

くねり断つに焼石象

詩

松山の街

1926.

むじは・のひに

登つて下りてニ軒茶屋
汗のしづくのふきあへぬ
ふと目についた俳句の日傘
かんかん帽のニ人連れ
ふいとそれたかたんは道

晩秋

ゆりあひの鐘の音
かすかに
杜から里へひろむるとき
はたたと散る
悲しき落葉
わが魂
またほらはらと

もう冬が

街路の燈柱で

寒さがうめいてゐた
あゝ、もう 冬か

「寒さ」の少年

「寒さ」の少年が
ゆきなりぼくの頬をうつた
そして
あざわらつて通りすぎた

冬

寒さは指先の神経を

殺害した

自動電話のどぶりは
烈風にとひなまれて
力なき動搖を続ける
蔭さんな冬は
電柱の二フーフに
つめたり接吻をうこして
まっしぐらに駆けてゆく

冬の夕

わたしの書斎の縁側に
つるしてある鳥籠の
二羽の文鳥が

瘦し木に伴よくならむひ
おしやべりしなことをす

「ろちの主人は

少しも文才がなりねし

鳴鳥です。

「そり世。そうさ。

あわをたべなりかうたよ。
し

雄鳥です。

さびしい斜陽が

鳥籠をつくむた

冬の夕です。

小由よ 申け

とりあらたに

かこせくよきひ

わかむねにむすびたる

ネケタイのかるきかな

すきりひのきお申へに

そとくちアけて

そらをお小作は

ひころきのらむふするあしたよ

小由よ 申け

はるよ こよ

きみにあひあふひも
くまはくはれたるひにてあれ

三年がけの恋

ゆさかひに
みあわす瞳と塵
悪火よ
ほくはもう次山だ

一フニフ三フ
これが三年がけの恋なのか

若いころの夢

恋火の瞳はほくの涙で
一拂りだったのです
ぬぐつてもぬぐつても
ぬぐひきれずの羽でした
ほくと恋火はその羽で
おぼれ死しやうとしたのです

若い時のはかなげ夢です

悲哀

求むるものゝ心は
淋しかつた
りたまらかつた
哀切の情は
こたばつたのだ
凍つたのだ
雪解けの春未るまで
あにたかき
魂の跳躍はなりであらう
魂はうつろへて
さんさん雪に泣く

桃色のと床

愛くるしげの瞳は
魂を悩殺したのです
草花一フ咲いてあなは荒聖は
縁に彩られて
もくゆるの世界が恵まれたのです
ゆく死かの後
その堅原に桃色の棘にさされて
死むてゐる魂があまりました

彼女の名は「悪」といつた

乙女のはちき北さうな白蠟の爪と股に
つよく持啣した

そこは赤潮を望んで
あやしくときめいた
わたしは彼女をかゝえろと
はてしなく彼女の叫びを
聲だかに発せながら
こんこんしたのだ

彼女の名は「恋」とりつた

「幸福とはそんなものなんだ」

魂の迷躰は
男と女との心癒を導一した
すべてが純化された

そして次の瞬間には
感激の涙がこみあげてきた
二人は生きんことを欲した
そして死ぬことをこいねがった
地球が急廻轉をおこした
高樓陋屋岩石樹木山々動物は
はねとばされてあつた
そして最後に男と女の魂も
いやと云ふ程たくまつけられた
快感かニルをたきすくめた

「幸福」とはそんなものなんだ

心のまじりこ

あたゝかりコーヒ
やさしの君の瞳
それだけが
いまの僕の慰安です

五録のコーヒ
それですとつて
立ちあがりなげればならなり
ろレタリアが僕です

おけど
愛らしのひとみよ君よ
君のうつくりさは
どこから求め得たのです

その瞳に癒っただけで
僕はもう死ぬでも本望です

松山の街

ほのぐらの朝
こぼりつめた空気をけあゆながら
城山の坂路をのぼってゆく
外套のえりをたて
阿光が松林を通して
ところどころまんたらな綺をつくった世面を
一フーフイロツては
きらきら輝いてゐる星に
なげかけてやる

あかつきが近り
夜はだんだんとさうりて
「また来るよー」とさか

ころひりきむに更ても
よせ木でできあがった
つきはぎだらけの松山の街は
朝の陽にさらされて
ホロと密柑の皮と豚肉とを
焼いたせうな
くさの蒸気をたててゆく
小鳥かさえぶって云ふに
「とこも、これではやりきれぬ」と
也加てきたるべき春は

雨の家々の窓をはたき
せせこけた庭木の手入れをしながら
云ふに遠いなり
「坊やよ
あんおとおてとを
あらうつておりでしと

雨の公園

さんさんと降る雨にけむる
道後公園のグラウンド
私はニフニフ四つと街燈をひらつた
つめたり夜の空気は
さびりり私の胸をおのくがす

ひろげた紫色の雨傘に
街燈の光を雨の足とは

こころよめまで乱舞する

こよひ招りだ若の藝妓の

えうけるゆるな艶姿のそれだ

しつせりとぬれに外套まんとをはたいて

急ぎ足に

ゲラウインドを横ざらうとする私の瞳に

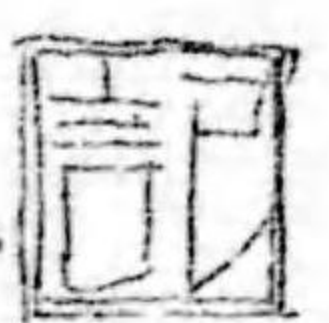
ふくらつたものは

よりまつた若の藝妓よ

あゝ爾にぬれた道後パーク！

私はなかに人生の旅に

ゆくたひおまへの夢を
思ひだすことせうか？



x

あゝも云ひころも云って随分お頼みした筈だが、あの夜うす御身
請君の不熱心にはあきれろほかなり。感想でも喫太のちよひから
書いてやらうと云ふに、ゆいよくな気にとうしてなりきれないのだ
らうか。「ゆいまは急かしのから他日余暇を見て書かしてもらふよ
な」とは片腹のたり投げだ。余暇のないなから書りてくれさつ
てこそ、われわれは有難りのだ。余暇に書りてくれたら何ぞう
れしからう。むしろこちらから御免かきむる。

事実々固ほと得手勝手なしろものかあうるか。「余暇がなれしと
云ふ一言でわれ／＼の尊い連鎖をたい三々の人達に握らせて、
それ等の人達がその連鎖をたぎる気がかうせてゐても知らぬ顔を
してゐるな」とはあまりに不人情だ。「余暇がなれしと云ふこと
はわれわれの辞書にあり得べき言葉ではなかり善だ。「余暇だから
書く」そんな言葉は早速のりのでりてりたさたり。

のつもながらにぐまれ口をたしくのかぼくのやぐめた。ゆくのとは云ひながら
あまり馬鹿々々しくてものも云へなり。それか云って黙つておれはまたぼく
の職務たりまへにもなる訳だ。いやな仕事をひきうけたもつた。近ごろもう痛
切に感ずる。

のつたの部長諸君はよく毎町可報をだすことさ。いらぬおせつかりたしと思
つてあるのではあるまいか。そうだつたらはつきり云つて渡きたり。その上い
またなんとか考慮したの。つらい思ひをしてよび。いらぬおせつかりしはした
くなりものだ。そう思つてゐる。

まいごぶつかりだが、本年度維持費未納の諸君は至急納めていたときたの、
うるさからうがお願ひしておく。もう今年も大々経つてゐるのだからお初め
願はなれと早く納められた諸君に對して申し訳もたしなり訳だ。特にお願いし
ておく。

今月はごらんを通りきりう君と、ぼくの小便と請ばかりだ。事実これだけ、
原稿もあつたなりなのだから、あきれてしまふ。せむせむ御奮発を願つてお
く。

エントレスレターの計画を遂行りはじめからもう十名名の部長の手をへて
あるが、せむせむ後援を希望する。中途の没収なんかさねてなごまる。どう
安全にぼくの手もとにまで歸してほしめ。

ずいぶん片まのきき口さきのだが、ゆくめおかう我慢してきりておいてもら
な。これかうもう夏だ。おたかひはうんとかむあつて大いに活動しなれば守
り厚い、御自愛をのりる。

如蘭俱樂部員名簿

東京市外上目黒一七六三 (三) 芦田 宅市
 東京市芝区金沢川口町一六 (三) 秋山 祐一
 東京府中表谷六七七 (三) 藤田 周弥
 久留米歩兵第四大隊中隊一年志願兵 (三) 梶 夜魯一
 東京府下流橋本三三三三 (三) 一ノ瀬 進
 都立歩兵第二十二隊隊中下隊二年志願兵 (三) 河 聖 慶次郎
 名古屋市中区南大津町好田信託株式会社名古屋支店 (三) 加藤 勝造
 香川県仲多度郡多度津町 (三) 松宮 栄
 東京 (三) 森田 龜 善知

東京府豊多摩郡聖方町上沼袋 (三) 中 島 重 徳
 東京市神田区渡河台井上眼科病院 (三) 長 尾 太 郎
 松山市久保町五〇 (三) 新 堅 一
 松山歩兵第三十二隊隊中下隊一年志願兵 (三) 砂 田 四 郎
 東京市外高円寺六〇三 (三) 酒 井 権 太 郎
 名古屋市東区三輪町一六 (三) 高 田 太 郎
 合身津若松市栄町三三三三旅館方 (三) 田 崎 旭 意
 東京市外代々木西山谷二四〇 (三) 丹 次 美 雄
 東京市下谷区神倉町一七 (三) 上 田 毛 之 助

倶楽部月報「如蘭」

◇「如蘭」は倶楽部員の意見交換機
 関であり、また談話室でもあります。
 ◇「如蘭」は毎月月上旬発行いたします。
 ◇原稿締切は毎月五日と定めておきます。
 ◇原稿はどんなものでも歓迎いたします。
 但しなるべく思想内容時事問題にあ
 くなく、なりものといふ制限はとり去り
 ません。
 ◇原稿届先は松山市久保町五〇。新堅一
 宛にお送りいたします。
 如蘭倶楽部維持費未納の部員諸君へ！
 ◇本年度維持費未納の諸君は至急合計

初まご御便宜の方法で御納め下さり。

◇合計額は東京市外中表谷六七七藤田
 同課です。
 ◇維持費徴収の通知は「如蘭」誌上でさ
 せていただきます。
 阿報「如蘭」の雄飛計画
 わたしは自分の全力をそそいでゐる
 倶楽部の阿報「如蘭」をして、もつ
 と有意義ならしむるために、私財一千
 円を供託して、時事問題思想問題にも
 自由に論戦を許さるべき雑誌たりし
 めんと計画してゐます。近々に実現
 するはこいひです。せりおの御声援下
 さい。
 (編輯室にて)

大正十五年七月廿五日印刷
大正十五年八月一日發行

編輯發行
兼印刷者

藤田阿弥

東京市下中坡台六七七

發行所

如蘭俱樂部

禁轉載 非賣品

印刷所

スツキ磨屋印刷所

東京市芝区豊洲三丁目三

終